

〔個人研究〕

インド仏教終焉期における大乘仏典受容の一例

顕密両修の学僧ラトナラクシタの著作を中心として

倉西憲一

はじめに

インドにおいて、仏教は13世紀初頭のムスリム侵攻によるヴィクラマシーラ僧院など仏教拠点の崩壊を皮切りに加速度的に終焉を迎えたとされている¹。その直前、すなわち仏教の終焉期ともいえる12世紀後半、仏教学僧たちはどのような学術活動をおこなっていたのであろうか。少なくとも終焉を迎える前、ヴィクラマシーラをはじめ、ナーランダー、オーダンプリー、ソーマプリー、ジャガッダラなどといった仏教学問の拠点がいくつか存在しており、それぞれの僧院では数多くの僧たちが学び、生活していた。また、これらの僧院は互いに交流があり、現在の大学や研究所のように研究者すなわち学僧の移動が頻繁に行われていたようである²。

本稿では、こうした仏教終焉期に活躍した学僧の一人であるラトナラクシタ（12世紀後半～13世紀前半）の著作 *Padmini* に注目し、そこに引用される多くの文献の中でも、特に大乘仏典³の引用に焦点を当てる。ラトナラクシタは顕密両修であったと言われるが、とりわけ密教に重点を置き、その知識の広さで知られていた人物である⁴。タントラの註釈書として著された *Padmini* における大乘仏典引用の傾向、さらにはタントラの理論を展開する上でこれらの引用がどのように用いられたのかを考察することによって、その当時の大乘仏典受容の一例を紹介したい。

1. ラトナラクシタとその著作 *Padmini*

まず始めにラトナラクシタおよびその著作 *Padmini* について簡単に触れ

ておきたい。

1.1. 学僧ラトナラクシタ

ラトナラクシタはインド仏教の終焉を経験した証人の一人である。もっぱら学僧として過ごしていたヴィクラマシーラ寺院の崩壊する直前、彼はネパールへ逃れた。さらに、チベットにも赴き、仏典のチベット語への翻訳や後進を育てることに従事したようである。本稿では、ごく簡単な紹介に留めるが、ラトナラクシタのより詳しい事績については静春樹2012を参照されたい。

ラトナラクシタの生没年および出身地に関しては未だはっきりしない。しかし、ヴィクラマシーラ寺院が破壊された1200年頃にはすでに学僧としての名声を博していたこと、また1226年にダルマスヴァーミン (Chag lo tsā ba) がインドに行く途中、ネパールでラトナラクシタに師事していた史実を勘案するに、そのときかなりの高齢であったとしても⁵、生存年代を1150年から1250年の間に設定することはまず問題なからう。ラトナラクシタはチベットへ巡行したとされるが、彼の地で没したという記録はないので、おそらくネパールへ戻り、その生を終えたと考えられる。また、出身地に関してはインド（おそらくベンガル地方）であるという説とネパールという説がある⁶。

ターラナータ⁷によればラトナラクシタは大衆部で具足戒を受けた僧といわれている。そして、同時期に活躍し、チベット仏教に多大な影響を及ぼしたカシミール出身の学僧シャーキャシュリーバドドラ⁸と比べられている。波羅蜜理趣 (pāramitānaya) および一般的な (因明以外の) 明処においては同等であり、強いて違いを挙げるとシャーキャシュリーバドドラは論理学に、一方のラトナラクシタは真言理趣 (mantranaya) の理解に長けていたとされる。ラトナラクシタの著作を繙くと、彼よりも約半世紀程前にヴィクラマシーラ寺院で活躍した学僧アバヤーカラグプタ (11世紀後半～12世紀前半)⁹ の影響を少なからず受けていたことがわかる。特に *Padmini* に説かれている灌頂やプラティシュター儀軌、また護摩儀軌はアバヤーカラグプタの

Vajrāvalī および *Jyotirmañjari* の解説をほぼそのまま踏襲している¹⁰。

ラトナラクシタの著作で現存するものは、チベット大蔵経によれば、以下の二点のみである。

- ① *Śrīsamvarodayamahātantrarājasya Padminī nāma pañjikā*¹¹ サンスクリット写本¹², Toh1420, Ota2136.
- ② **Gaṇacakravidhicintāmaṇi*¹³ Toh2494, Ota3320.

さらに、ラトナラクシタは自らの著作を含むいくつかの文献のチベット語への翻訳にも携わっている。それらはすべて静2012 (pp.147-145) に列挙されているので、本稿では繰り返さない。特にアバヤーカラグプタの密教に関する著作の翻訳を手がけており、中でも *Vajrāvalī* や *Niṣpannayogāvalī* など重要な文献の翻訳に関わっている。こうした事実を勘案するに、ラトナラクシタがその当時アバヤーカラグプタの密教の伝統に最も精通していた人物の一人であったと推察される。

1.2. *Padminī* という著作

本稿で取り上げるラトナラクシタの *Padminī* は、インド後期密教文献のタントラ分類¹⁴ではヨーギニータントラに分類される *Samvarodayatantra* に対する註釈書の一つである。前述したようにラトナラクシタに帰される著作は二作のみ現存する。そのうち *Padminī* は幸運なことにサンスクリット原典がほぼ完全な状態で残されている。そして、いわゆるタントラの逐語的註釈書という性質だけでなく、所々に著者の様々な教理に関する考察もみられることから、ラトナラクシタの思想背景、さらには当時の学術活動の一端を知る上でも大変重要な資料である。しかしながら、これまで種村2010によって、第21章「チャルヤーの章」の校訂テキストおよびその注解が出版されている以外はほとんど研究されていないのが実情である¹⁵。

ターラナータによれば、*Padminī* はラトナラクシタがチベットへ赴いた際に著されたとする¹⁶。

2. *Padminī* に引用される大乘仏典とその受容

長大な著作 *Padminī* の中で、ラトナラクシタは顕密にかかわらず多くの文献を引用¹⁷し、諸理論を展開している。それら引用文献は *Samvarodayatantra* の註釈書という性質上、また著者自身が密教に重点をおいていることから、密教文献の引用が圧倒的に多いことは言うまでもない。これら引用されている密教文献に関しては他の機会に改めて紹介する。本稿では紙幅の関係上、大乘仏典の引用から主要なものを列挙する。そして、*Padminī* の中で大乘仏典の引用がどのように理論展開上用いられているのかについて具体例を挙げ、当時の大乘仏典受容を考察したい。

2.1. 引用リスト

Padminī は大乘の経典および論書共に幅広く引用する。以下は特に引用元の明確なもののリストである。なお、テキストはサンスクリット写本が示すとおりを読みを示す。また、*Padminī* 文中で著者名もしくはテキスト名が示されている場合には下線を引いた。

経典：

1) *Anantamukhanirhārādihārāṇī*¹⁸

na cintāṃ cintayec cintyām acintyān naiva cintayet |
cintyācintyāṃ na cintayet tataḥ prāpsyati dhāriṇīm || (*Padminī* Ch.13 CA17 f.23r9-10)

2) *Avikalpapraveśadhārāṇī*¹⁹

Matsuda p.99:praśāntam acalaṃ śreṣṭhaṃ vaśavarti samāsamam |
avikalpasukhāṃ tasmād bodhisattvo 'dhigacchati || (*Padminī* Ch.13 CA17 f.23v1)

3) *Pitāputrasamāgama*²⁰

asti bhagavan sarvadharmasukhākṛānto nāma samādhiḥ | yasya samādheḥ pratilambhād
bodhisattvaḥ sarvālambanavastuḥ sukhāṃ eva vedanāṃ vedayate na duḥkhān
nāduḥkhāsukhāṃ ityādy uktaṃ | kāṛṣāpanacchedikām api cchidyamāṇasya piṇḍapācīkām
api pacyamāṇasya hastibhir vā mardyamāṇasya sukhasaṃjñānaiva pravartate | (*Padminī*
Ch.13 CA17 f.23v1-2)

4) Bhagavatī (Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā)

Ch.1 Vaidya p.3: asti tac cittam yac cittam acittam || (*Padmini* Ch.29 CA17 f.43r1),

Ch.2 Vaidya p.23:rūpānantatayānantapāramiteyam (*Padmini* Ch.13 CA17 f.22r11),

Ch.8 Vaidya p.98:ākāśe sa yogam āpadyate sa abhyavakāśe yogam āpadyate yāḥ
prajñāpāramitāyāṃ yogam āpadyate | (*Padmini* Ch.13 CA17 f.23r11)

5) Ratnakūṭa (Kāśyapaparivarta)

Sec. 6: anantabodhiḥ sugatena deśitā (*Padmini* Ch.13 CA17 f.21v10)

Sec. 49:²¹ tadyathā, kāśyapa ikṣukṣetre śālikṣetre mṛdvikākṣetre vā saṅkarakūṭa
upakāribhūto bhavati, evam eva bodhisattvānāṃ kleśā upakāribhūtā bhavanti | (*Padmini*
Ch.13 CA17 f.23v7-8)

6) Laṅkāvatāra

Ch.2 140cd: utpadyante nirūdhyanṭe pratyayā eva kevalāḥ | (*Padmini* Ch.3 CA17 f.9v2)

論典：

1) Abhisamayālamkāra

Ch.4 v.48b: kāmasevābhyupāyiki | (*Padmini* Ch.13 CA17 f.23v6)

2) Catuḥśataka Āryadeva

Ch.12 v.18:²² bijabhūtān anarthasya dṛṣtvā tīrthakarān bahūn |
na bhavet kasya kāruṇyaṃ dharmakāmeṣu jantuṣu ||
(*Padmini* Ch.4 CA17 f.10v3)

3) Prajñāpāramitāpiṇḍārtha Diṅnāga

vv.3-4:²³ śraddhāvatāṃ pravṛtṭyaṅgaṃ śāstā parṣac ca sāksṇiṇi |
deśakālau ca nirdiṣṭau svaprāmānyapasiddhaye ||
saṅgītikartrā loke hi deśakālopalakṣitam |
sasākṣikam vadan vaktā prāmānyam adhigacchati ||
(*Padmini* Ch.1 CA17 f.1v6-7)

4) Pramāṇavārttika Dharmakīrti

Ch.3 v.285:²⁴ tasmād bhūtam abhūtam vā yad yad evātibhāvyaṭe |
bhāvanābalaniṣpattau tat sphuṭākālpadhiphalam ||
(*Padmini* Ch.13 CA17 f.22r3)

5) Bodhicaryāvatāra Śāntideva

Ch.5 vv.10-11: phalena saha sarvasvatyāgacittāḥ jane 'khile |
dānapāramitā proktā tasmāt sā cittam eva tu ||
matsyādayaḥ kva niyantāṃ mārayeyaṃ yato na tān |

(214)

labdhe viraticitte tu śīlapāramitā matā || (Padminī Ch.13 CA17 f.22r6-7)

Ch.9 v.144: māyayā nirmitaṃ yac ca hetubhir yacca nirmitaṃ |

āyāti tat kutaḥ kutra yāti ceti nirūpyatām || (Padminī Ch.2 CA17 f.7v7)

6) Bodhicittavivarāṇa²⁵ Nāgārjuna (Āryapāda)

v.49: anutpādeti sūnyeti nirātmeti ca dharmatām |

yo bhāvayati mandātmā na tāṃ bhāvayati hy asau || (Padminī Ch.13 CA17 f.22r1)

7) Mahāyānottaratantra (Ratnagotravibhāga)

Ch.1 v.28: saṃbuddhakāyaspharaṇāt tathatāvyatibhedataḥ |

gotrataś ca sadā sarve buddhagarbhāḥ śārīriṇāḥ || (Padminī Ch.1 CA17 f.3r8-9)

Ch.1 v153: śradhdhayaivānugantavyaṃ paramārthe svayambhuvām |

na hy acakṣuḥ prabhādīptam ikṣate sūryamaṇḍalam || (Padminī Ch.1 CA17 f.4v2)

上記リストからわかるように、第1章では「仏果 (buddhatva)」、第13章では「修習 (bhāvanā)」というトピックが扱われているが、そこで大乘仏典の引用を豊富に用いて、自説を展開しているのは興味深い。いわば、この二つの章にラトナラクシタの思想的根幹が集約されていると言っても過言ではないだろう。

2.2. 具体例 (第13章：生起次第の効果)

本稿では、第13章に展開されている生起次第の修習に関する議論に焦点を当て、その議論のなかでどのように大乘仏典が扱われているかを見ていきたい。註釈対象である *Samvarodayatantra* の第13章「へールカ出生の説示」(śriherukodayanirdeśa) では、いわゆるインド後期密教の修習方法の一つである「生起・究竟の二次第」のうちの生起次第が説かれている。生起次第とはマンダラを観想上で構築していくプロセスであり、マンダラの尊格と一体化することを目的とする。

ラトナラクシタは第13章を註釈するに当たって、まずタントラ本文の逐語的解釈をする。そして、最終偈である第43偈の「不二の形相とのヨーガを通して不可思議な境地が説かれた」²⁶という文章の解釈を提示してから、「不二の形相とのヨーガ (=生起次第)」によって、「不可思議な境地 (=仏果)」

の獲得が可能であるのかという議論を展開する²⁷。そこでは、まず仮想反論者は「生起次第つまり戯論の次第の修習によっては、三昧 (samādhi) の獲得もない」²⁸という反論を掲げる。それは論理 (yukti) および聖典 (āgama) に矛盾しているからとし、その矛盾点を提示していく。こうした論難に対して、ラトナラクシタは一々論破していくことで、持論の正当性を論証する。なお、ここで展開されている議論一つ一つについて詳しくは稿を改めたい。以下、この議論において、始めに掲げられた論難およびそれに対するラトナラクシタの論駁の要約を挙げ、特に彼の論駁の中で引用される大乘仏典の役割を見ながら、どのようにして生起次第の効果を証明しているのかを見ていきたい。

<論難>²⁹

「戯論の次第である生起次第によっては、三昧の獲得すらない」という反論の中で、二つ以上の構想作用は同時にありえないと論難する。それはつまり、生起次第の観想法の中でマンダラを構成する尊格の形象を事細かく観想することが説かれているが、尊格の腕を観想しているときは同時に顔など他の部分を観想することができないし、その逆もあり得ないとする。そして、観想できなければ、顔などが顕現することもない。こうした生起次第において尊格の姿形を詳細に、かつ同時に観想することは不可能であり、よしんば出来たとしても多くの構想作用による迷乱の状態であって、心一境性を特徴とする三昧とはならない。それゆえに、生起次第の修習は結果としての仏果の獲得に効果はない。

<論駁>³⁰

ラトナラクシタは上記の論難に対して、このように論駁する。生起次第では、すべてのすばらしい形象を備えた空性と一味である大楽の状態にある対象 (尊格) を修習しているのであって、単に形象のみを修習しているわけではない。すなわち、修習されるべき対象 (尊格) 自体は形象を捨て去って、法性のみが形象から離れて存立することはない。その教証として以下アーリ

ヤデーヴァおよびナーガールジュナの著作から一偏ずつを引用している。

アーリヤデーヴァ上足によって説かれている。

「愚か者たちは非存在の修習のみに従事する。[そうした] 彼ら未熟者たちは虚空を性質としており、この上ない愚鈍となる」³¹。

そして、アーリヤ上足 (=ナーガールジュナ) によっても [説かれている]。

「法性を不生だとか、空だとか、無我だとか修習する愚かな彼はそれ(法性)を[真に]修習しない」³²。

最初の引用元は未同定である。少なくともラトナラクシタは中観のアーリヤデーヴァを意図していたのであろうが、*Guhyasamājatantra* の注釈流派である聖者流の人物など密教系同名異人³³の著作から引用した可能性も考えられる。次の引用はナーガールジュナに帰せられる *Bodhicittavivaraṇa* (v.49) である。この引用では、意味内容には違いはないが、ラトナラクシタは自身の「法性のみが形象から離れて存立しない」という説明に沿うように意図的に本来の引用元の言葉「空性 (sūnyatām)」を [法性 (dharmatām)] と改変して引用した可能性がある。

そして、「生起次第の修習によって心一境性を特徴とする三昧の獲得はない」という反論者の主張に対し、ダルマキールティの説く四種の直接知覚の一つ「ヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa / yogijñāna)」の論理を適用し、以下のように論駁する。真剣に行うなど (という優れた性質) をともなった反復修習によって (ādarādiviśiṣṭenābhyāsenā)³⁴、心が対象に強く依拠している場合、心の堅固さが獲得されるのは経験上確定しているから、上記論難は正しくない、と。そして、彼はさらに、こうした宗教的超常的な知覚の教証として頻繁に用いられるダルマキールティの *Pramāṇavārttika* (3.285)³⁵ を引用する。

「それゆえに、存在あるいは非存在を、まさに強く観想するものはなん

であれ、修習の力が成熟したとき、それは構想作用を離れた明瞭な智を結果として持つ。

この引用偈には興味深い異読が二つ含まれている。まずは「強く観想する (atibhāvyate, shin tu goms gyur pa)」である。引用元は abhibhāvyate となっており、おそらく元来はそうあったのであろう。もう一つの異読は「修習の力による完成において (bhāvanābalaniṣpattau, bsgoms pas stobs ni rdzogs pas na)」である。これは引用元やその註釈など関連文献のほとんどが「修習が完成したとき (bhāvanāpariniṣpattau)」としている。これらの異読は、単に文字の類似による書写ミスであるかもしれない。しかしながら、特に神秘的な体験が求められている密教文献中の引用において、しばしば見られることから³⁶、これらの異読はいつ頃からかは定かではないが、密教教理への整合性を求めるものたちによって意図的に改変された可能性も考えられる。

続けて、同じく教証として、*Samvarodayatantra* (Ch.31, v.31) を引用する³⁷。

「人々の心は実にどのように結びつけられても、それによってその形をとるようになる。例えば、様々な姿形をもつ宝石のように」。

そして、尊格の部分をそれぞれ修習することが多くの構想作用をともなった迷乱状態であるという反論にも以下のように答えている。「尊格の腕や顔など多くの修習対象がある場合でも、分別されていない形象が同時に見られたり、聞かれたりして、そのように顕現することは経験上確定している」と。すなわち、何か一つのものを見たり、聞いたりするときも、その周りの分別されていないそれ以外のものが認識されるように、対象である尊格の多くの部分と全体を同時に修習することに何ら過失はない。

このように、ラトナラクシタは生起次第において尊格を修習の対象とする正当性を示してから、その尊格の多様な部分の修習と心一境性には些かも論

(218)

理的矛盾はなく、生起次第によって三昧獲得すなわち仏果獲得は可能であることを論証している。

以上、第13章で展開されている議論のほんの触りのみを紹介した。何故、ラトナラクシタは傍論として紙幅を大きく割き、生起次第の効果について論じたのであろうか。ラトナラクシタの想定する反論者はおそらく密教者であり、生起次第を否定するのではなく、それのみによる本尊との一体化（仏果の獲得）に疑問を持つ者である。彼の存命当時、こうした者たちが少なからず存在し、教理上の争点となっていたのであろう。あるいは、*Padmini* がチベットで著されたとするターラナータの説が正しいとするならば、この著作はチベットの僧侶たちのために著されたはずであり、チベット仏教においても、こうした論点への関心は共有されていたと推測できよう。

おわりに

本稿では、特にインド仏教終焉期に活躍した学僧ラトナラクシタの著作 *Padmini* に引用される大乘仏典の傾向を主要な引用リストを挙げ、確認した。さらに、これら的大乗仏典がどのようにラトナラクシタの学術活動に反映されているかについて第13章に展開されている生起次第の効果に関する議論を通して、垣間見た。10世紀以降のインド仏教では、概して密教（真言理趣）が顕教（波羅密理趣）よりも上位に置かれていた。例えば、ラトナーカラシャーンティのような顕密両修の学僧たちが中観や唯識など顕教の教理を密教に織り込みながら、仏教思想の総合化を進めていく。こうした試みのなかで、大乘仏典はその権威をそのままに密教思想の基盤としての役割を果たすことになるのである。

（謝辞 本稿執筆にあたっては、科研プロジェクトの代表者久間泰賢氏、同じく *Padmini* 研究に従事する種村隆元氏、加納和雄氏およびその他プロ

ジェクト関係者の先生方，そしてハンブルグ大学 Harunaga Isaacson 氏，ナポリ大学 Francesco Sferra 氏など多くの諸氏から助言を得ました。記して謝意を表します。)

参考文献

Bendall, C. 1897-1902 *Çikshāsamuccaya: a compendium of Buddhist teaching compiled by Çāntideva chiefly from earlier Mahayana-sūtras*, Bibliotheca Buddhica vol. 1, St. Pétersbourg

Bühnemann G. 1992 Some Remarks on the date of Abhayākaragupta and the Chronology of His Works, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, vol.142 no.1 pp.120-127

CIHTS 1996 *Tattvaratnāvalokaḥ with Vivaraṇa of Mahāpaṇḍita-Vāgīśvarakīrti, Dhīḥ* vol.21, pp.129-149 Sarnath

Dutt, S. 1961 *Buddhist Monks And Monasteries of India: Their History and their Contribution to Indian Culture*, 1962, London

羽田野伯猷 1986 「Kāsmīra-mahāpaṇḍita “Śākyaśribhadra” チベット近世仏教史・序説」『チベット・インド学集成』第一巻, pp.239-258

堀内寛仁 1996 「出生無辺門陀羅尼經の研究」『金剛頂經形成の研究』堀内寛仁論集 下 pp.119-371

Isaacson H. 1999 Citations from the Ratnāvali and Bodhicittavivaraṇa in the Abhayapaddhati, *Studien zur Indologie und Iranistik*, Band 22, pp.122-134

Krishnamacharya, E. 1926 *Tattvasaṅgraha of Śāntarākṣita with the commentary of Kamalaśīla*, GOS vol.30, 31

Kuranishi K. 2011 Note on the Classification of Buddhist Tantras — The View of Jinadatta and Śrīdharā —, 『豊山教学大会紀要』 第39号, pp.1-11

倉西憲一 2012 On the Manuscript NAK 3/716 (NGMPP A48/11): The *Sadāmnāyānusāriṇī*, a Commentary on the *Samvarodayatantra*, 『印度

(220)

学仏教学研究』 60-3, pp.(147)-(150)

Lal, B. 1994 *Āryamañjuśrīnāmasaṅgīti with Amṛtakaṇikāṭippaṇī by Bhikṣu Raviśrījñāna and Amṛtakaṇikodyotanibandha of Vibhūticandra*, Bibliotheca Indo-Tibetica 30, Sarnath

Lewis, T.T. 1996 A Chronology of Newar-Tibetan Relations in the Kathmandu Valley, S. Lienhard, ed., *Change and Continuity*, Torino, pp. 149-166.

松田和信 1996 「Nirvikalpapraveśadhāraṇī Sanskrit Text and Japanese Translation」『佛教大学総合研究所紀要』第3号, pp.89-113

中山照令 1994 「インド仏教終焉のころ」『成田山仏教研究所紀要』17

Pandey, J.S. 2000 *Caryāmelāpakapradīpam of Ācārya Āryadeva*, Rare Buddhist Texts Series vol.22, Sarnath

Pandeya, R. 1989 *The Pramāṇavārttikam of Ācārya Dharmakīrti with the commentaries of svopajñavṛtti of the author and Pramāṇavārttikavṛtti of Manorathanandin*, Motilal Banarsidass

Raverty, H.G. 1970 (rep.) *Ṭabaqāt-i-Nāṣirī A general History of the Muhammadan Dynasties of Asia, including Hindustan; from A.H. 194 (810 A.D.) to A.H. 658 (1260 A.D.) and the Irruption of the Infidel Mughal into Islam*, 2 vols, (reprinted, Munshiram Manoharlal)

Roerich, G. 1959 *Biography of Dharmasvāmin (Chag lo tsa-ba Chos-rjes dpal) A Tibetan Monk Pilgrim*, K.P. Jayaswal Research Institute Patna

Schiefner, A. 1963 (rep.) *Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione* (reprinted, Suzuki Research Foundation)

Tsuda, S. 1974 *The Saṃvarodaya-tantra Selected Chapters*, Hokuseido Press

Sinclair, I. 2011 Book Review: Mori, M, *Vajrāvalī of Abhayākara Gupta: Edition of Sanskrit and Tibetan Versions*, 2vols., Buddhica Britannica Series Continua XI, Tring; *Sambhāṣā* 29, pp.94-100

静春樹 2012 「ラトナラクシタのガナチャクラ儀軌和訳研究」高野山大学密教文化研究所紀要 第25号 pp.150(21)-116(55)

Steinkellner, E. 2007 *Dharmakīrti's Pramānaviniśaya: Chapter 1 and 2 (Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region)*, Austrian Academy of Sciences

種村隆元 2010 「Saṃvarodayatantra 第21章 Caryānirdeśapaṭala に関する一考察：Padminī 第21章校訂テキスト並びに註」『密教学研究』41

Vaidya, P.L. 1960 *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Text Series vol.4, Darbhanga

Wogihara, U. 1932-1935 *Abhisamyālaṃkāra'ālokā Prajñāpāramitāvyaḥyā (Commentary on Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā)*, Tokyo

(本稿は平成24年度科学技術研究費助成金 [基盤 (B)・課題番号22320014・代表 久間泰賢] による研究成果の一部である。)

¹ この仏教拠点が崩壊していく様子は、その時期にインド・ナーランダーに赴いたチベット人学僧ダルマスヴァーミン (チャク翻訳官) の伝記 (Roerich 1959), およびターラナータの『インド仏教史』(Schiefner 1963: 191-194) などに記されている。さらにムスリム側の史料 *Ṭabaqāt-i-Nāṣiri* (Raverty 1970: 551-552) からも当時の仏教拠点の崩壊していく様子がうかがえる。

² 例えば, Dutt 1961: 352-353 を参照。

³ 「大乘仏典」という呼称あるいは概念は、厳密に言えば、顕教および密教の文献も含んでいるが、本稿では顕教のそれに限定する。

⁴ Schiefner 1963: 192 参照。

⁵ 中山 1994: 242, n.3

⁶ Lewis 1996: 156 など参照。

⁷ Schiefner 1963: 192

⁸ シャーキャシュリーバドラの事績などに関しては羽田野1986などを参照。

⁹ アバヤーカラグプタの事績や生存年代に関しては Bühnemann 1992 など多数論文がある。それら論文の中でパーラ王朝のラーマパーラ王 (1077-1119在位) とほぼ同年代であるということは共通している。ラトナラクシタは彼に直接教えを受けたのではなく、おそらく孫弟子の代に当たると考えられる。

- ¹⁰ *Padminī* とアバヤーカラグプタの著作 *Vajrāvalī* との影響関係に関しては Sinclair 2011: 96, n.4 などを参照。
- ¹¹ 文献名に関しては写本の奥書 (Takaoka CA17: fol. 49r11) 参照。
- ¹² *Padminī* のサンスクリット写本は現在のところ、以下の三本がある。後の二本②③は①のアボグラフである。
- ① Takaoka CA17: 49 fols., 紙本, 完本, Samvat 762 (= 1642 AD).
- ② Baroda 78: 92 fols., 紙本, 完本。
- ③ Tucci コレクション No.12 (= sscr 7): 35 fols., 紙本, 不完全 (ch.1-13). No.26 (= sscr9): 41 fols., 紙本, 不完全 (ch.18-32).
- さらに, *Padminī* とほぼ同内容を有しているが, 短い構成の *Sadāmnāyānusārī* (著者不明) という文献がある。この文献の詳細に関しては倉西2012を参照されたい。
- ¹³ 静2012において校訂翻訳されている。
- ¹⁴ インドにおけるタントラの分類はいくつかのヴァリエーションがある。詳しくは Kuranishi 2011 など参照。
- ¹⁵ 現在, 三重大学の久間泰賢氏による科研プロジェクト「ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群における密教思想の位置づけに関する総合的研究」[基盤研究 (B) (一般)] の一環として, 同プロジェクトの研究分担者である種村隆元氏, 加納和雄氏および本稿筆者により, いくつかの章の校訂翻訳作業が行われている。
- ¹⁶ Schiefner 1963: 192
- ¹⁷ いくつかの引用に関しては倉西2012においてすでに紹介した。特に大乘仏典ではアーリヤデーヴァの *Catuḥśataka* からの引用を挙げた。この引用偈はこれまでサンスクリット原文が回収されていない。
- ¹⁸ 陀羅尼からの引用であるが, ラトナラクシタはこの陀羅尼を顕教 (*pāramitānaya*) 側の教証として引用する。ヴィクラマシーラ寺院の学僧ヴァーギーシュヴァラキールティ (10世紀頃) の *Mṛtyuvañcanopadeśa* にも引用されている。 *Mṛtyuvañcanopadeśa* では *dhāriṇim* の代わりに *sūnyatām* とある。漢訳も九本現存し, 最古の訳は支謙訳 (三世紀) である。また, ジュニャーナガルバによる註釈がチベット大蔵経 (Toh2696, Ota3520) に収録されている。この陀羅尼の名はシャーンティデーヴァの *Śikṣāsamuccya* にも登場し, 他の偈が引用されている。本陀羅尼及びその註釈の翻訳研究がある (堀内1996)。当該偈は p.231 (19) 参照。
- ¹⁹ 上記1) と同様, 陀羅尼であるが, 顕教側の教証として引用される。漢訳『佛説入無分別法門經』 (大正654) もあり, カマラシーラによる註釈がチベット大蔵経 (Toh4000, Ota5510) に収録されている。
- ²⁰ *Pitāputrasamāgama* (『大宝積経』「菩薩見実会」: 大正310 (16), 『父子合集経』: 大正320) は様々な仏典に引用されている。ここで引用されている箇所はシャーンティデー

ヴァの *Śikṣāsamuccaya* (Bendall: 181-182) にも引用されている。ここでは点線部 *ityādy uktam* によって中略されているが、*Śikṣāsamuccaya* は略さず引用する。

²¹ 牛糞などが畑の肥やし（補助）になるように、煩惱は菩薩の補助となるというこの引用はしばしば密教文献に引用される。例えば、聖者流アーリヤデーヴァの著作 *Caryāmēlāpakapradīpa* (Pandey Ed.: 80) などが挙げられる。

²² この引用偈は、これまでサンスクリット原文が回収されていない。詳しくは倉西2012参照。

²³ 経典の権威を表した有名な偈であり、ハリパドラの *Abhisamayālaṃkāraloka* (Wogihara Ed.: 15) などにも引用されている。

²⁴ 同じく *Pramāṇavinīścaya* 1 v.31 (Steinkellner Ed.: 28) 参照。

²⁵ ラトナラクシタはナーガールジュナの著作を挙げる際には「アーリヤパーダ」と示す。しかしながら、*Bodhicittavivarāṇa* は、おそらくその内容から中観のナーガールジュナの著作ではないと思われる。この偈を含む前後がアバヤカラグプタの *Munimatālaṃkāra* (Toh3903: 160a6-161a4, Ota5299: 202a4-203b2) に引用されている。さらに、この偈はラトナラクシタと同時代人であるヴィブーティチャンドラの *Amṛtakaṇṭhikodyotanibandha* (Lal Ed.: 150, 177) にも引用されている。Cf. Isaacson 1999: 58 n.15

²⁶ *Samvarodayatanta* (Ch.13, v.43ab): *advayākārayogena acintyapadadeśanā | ; Padminī* (Takaoka CA17: f.21r6): *advayetyādi | yato mahāsukhamayaśūnyatādvayākārayogenācintyapadasya buddhatvasya deśanety arthaḥ |*

²⁷ 議論は章末まで続いている。(Takaoka CA17: ff.21r7-24r3)

²⁸ *utpattikramaprapañcakramabhāvanayā samādhiḷabho 'pi na bhavati |* (Takaoka CA17: f.21r3)

²⁹ *Padminī* (Takaoka CA17: f.21r8-9)

³⁰ *Padminī* (Takaoka CA17: 21v10-22r4)

³¹ *abhāvabhāvanām mūḍhāḥ kevalām ya upāsate | te vyomadharmiṇo bālāḥ prayānti jaḍatām parām || [upāsate] em.; upāsate MS* (Takaoka CA17: f.21v11-22r1)

³² テキストは上記2.1リストの6)参照。

³³ 他には *Catuṣpiṭha* 系の儀軌を著したアーリヤデーヴァなどが挙げられる。

³⁴ ここでいう特別な反復修習とは、「ヨーギンの直接知覚」の必要要因として挙げられる「真剣で間断のない長い間の反復修習 (*sādarānirantarādīrghakālābhyaśa*)」を意図している。カマラシーラの *Tattvasaṃgrahaṇjīkā* (Krishnamacharya Ed: 870)

³⁵ 上記2.1リストの4)参照。

³⁶ 例えば、ヴァーギーシュヴァアラキールティの *Tattvaratnāvaloka* (CIHTS Ed.: 144) や

シュリーダラの *Sahajālokapañjikā* (MS 7r2-3) などが挙げられる。なお、マノーラタナンディンの *Pramāṇavārttikavṛtti* (Pandeya Ed.: 121) では、次偈 (3.286) の註釈において *bhāvanābalabhāviṣu spaṣṭanirvikalpeṣu* としており、この異読の下地を予測させる。

³⁷ *yena yena hi bhāvena manaḥ saṃyujyate nṛṇām | tena tanmayatām yāti viśvarūpo maṇir yathā ||* (Takaoka CA17: f.22r3). ラトナラクシタはこの偈を引用する際に「タントラにおいて (tantrē 'pi)」と述べていることから、おそらく *Padminī* の註釈対照である *Samvarodayatantra* (Ch.31 v.31) を意図して引用したのであろう。しかしながら、他にも多くの密教文献 (*Vajrapañjaratantra*, *Yoginisañcāra*, *Tattvasiddhi*, *Yogimanoharā* など) に引用されており、仏教タントラにおいて重要な偈であったと考えられる。さらに、*Śaiva* の比較的古い文献 (9世紀頃書写された写本有り) *Bhairavamaṅgalā* にも類似偈が見られることから、本偈のオリジナルは仏教だけでなく、ヒンドゥー教でもよく知られた偈であって、おそらくその成立は古い。